

	学部長	学 長
閱 覧		

国 外 派 遣 研 究 員 報 告 書

令和 7年 5月 30日

國學院大學学長 殿

所属・職名 文学部 准教授

氏 名 進藤 久乃



令和 6 年度 国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1 派遣期間 (期間延長のある場合は含めて下さい)

令和 6 年 9月 1日 から 令和 7年 2月 28日 まで

実際の出国日 6年 9月 14日 同帰国日 7年 2月 22日

2 受入先研究機関など

KU Leuven (ベルギー・ルーヴェンカトリック大学)

Faculty of Arts (文学部)

selfsupporting visiting research associate (客員研究員)

受け入れ教員: David Martens (ダヴィッド・マルタン氏、ルーヴェン・カトリック大学文学部、フランス・イタリア・スペインセクション、准教授)

3 研究目的

ベルギー出身のシュルレアリスム詩人、クリスチャン・ドートルモン (1922-1979) を中心として、第二次世界大戦後の実験芸術グループであるコブラ (CoBrA) の活動について研究する。

その上で、これまであまり積極的に評価されてこなかった第二次世界大戦後のシュルレアリスム、及び前衛芸術について再検討を進める。

また、『シュルレアリスム宣言』(1924) 100周年を記念した多くの展覧会やシンポジウムが行われるため、それらに参加してシュルレアリスム研究の動向を探る。

4 派遣中の研究概要

ここ数年、ナチス占領下パリでシュルレアリスムを引き継ごうとした「ペンを持つ手」グループと、そこから派生した第二次大戦後のシュルレアリスム周辺の前衛について研究を進めてきた。とりわけ二十世紀ベルギーの詩人であるクリスチャン・ドートルモンとコブラグループについて調査を進める中で、戦後前衛史におけるベルギーの詩人・芸術家たちの重要性を認識し、国外派遣研究期間を6ヶ月間取得し、ベルギーでの資料調査に充てることにした。國學院大學文学部と協定を結んでいるルーヴェン・カトリック大学 (KU Leuven) に受入を依頼した。

1) 国際シンポジウム「前衛と戦争」*Avant-garde and war* での研究発表

国外派遣研究を開始するにあたり、日本でも収集できる作品や先行研究を読解しながら、ドートルモンについてはある程度研究を進めていた。コブラグループの出版物は Jean-Michel Place 社のリプリント版が出版されており、ドートルモンの著作は2022年に出版された注釈版のおかげでエッセー、詩篇の多くを読むことができた。これらの資料を使ったひとまずの成果は、「*Le voyage vers le Nord de Christian Dotremont - un cas de décentralisation surréaliste après la deuxième guerre mondiale*」(クリスチャン・ドートルモンの北方への旅 第二次世界大戦後シュルレアリスムの地方分権の一例)として、前衛とモダニズム研究ヨーロッパ組織 (European Network for Avant-Garde and Modernism Studies) 主催のシンポジウム「前衛と戦争」(ヤギェウォ大学、ポーランド・クラクフ、2024年9月17日-20日)で発表した。

2) クリスチャン・ドートルモンとコブラについての研究

国外派遣期間中は、ブリュッセルの王立図書館と、同じ建物内にある文学博物館・資料館 (AML) に定期的に通い、貴重書を中心として資料収集を行なった。ドートルモンの作品は出版状況が複雑で、初版は少数しか出版されず、重要な詩篇やテキストは後からまとめて出版されたものが多い。入手しにくかった初版本(とりわけ「ロゴグラム」についての書籍、友人の画家がイラストを添えた詩集)や、ドートルモンが関わった雑誌(ベルギー共産党系の機関誌、美術雑誌など)でリプリント版がないものを収集した。

9月に「前衛と戦争」シンポジウムで発表した内容を元に、ブリュッセルの王立図書館で行なった資料収集を通じて発展させたものを、「クリスチャン・ドートルモンと北方への旅」として『Walpurgis 2025』(國學院大學外国語文化学科紀要)に発表した。

4 派遣中の研究概要（続）

ドートルモンがベルギー共産党と決別した後、デンマークの民衆文化に大衆と前衛芸術の和解の希望を見出す一方、病や愛を言葉の問題として考察しつつ自らの詩学を発展させていくことを明らかにした。

また、王立図書館と AML で「ロゴグラム」についての書籍やイラストを伴う初版本を数多く収集した結果、ドートルモンの詩学における言葉の理論的探究（記号としての言葉についての論考）と視覚詩的实践（記号としての役割を逃れる言葉の視覚的要素を使った詩作品）の関わりについての考察をより深めることができた。その成果は、「クリスチャン・ドートルモンの詩学における「抽象」——読むことと見ることの結び目」として『國學院雑誌』に発表した。

3) 『シュルレアリスム宣言』100周年を記念した展覧会・シンポジウムにおける資料収集

2024 年は、アンドレ・ブルトンが『シュルレアリスム宣言』を出版し、フランスでシュルレアリスムが正式に発足して 100 年という節目だったため、フランス、ベルギーでも多くの展覧会、シンポジウムが開催された。

中でも最大のイベントであるパリのポンピドゥーセンターで行われたシュルレアリスム展を訪問して資料収集を行い、その成果の一部を「シュルレアリスム宣言 100 年記念講演会」（2024 年 11 月 23 日・一時帰国時）で発表した。ベルギーでは、シャルルロワの写真美術館、モンスの現代美術館で行われたシュルレアリスム展を訪問することができた。企画展ではないものの、ラ・ルヴィエールにあるアーカイブ兼展示スペースである Centre Daily-Bul & C° では、ベルギーシュルレアリスムのエノーグループに関する資料も見つけることができた。

また、パリ・アメリカ大学で 2024 年 10 月に開催された国際シュルレアリスム学会（ISSS）の国際学会を聴講した。シュルレアリスム研究の地域面、学術領域面における多様性が近年の傾向を認識した一方で、シュルレアリスムの文学史・美術史における位置づけを地道に考察し続けることの必要性も感じた。11 月には「シュルレアリスムの国際的アーカイブ：総括」を聴講し、シュルレアリスム関連の資料の所蔵、公開、活用の現状を知ることができ、大変有益だった。シュルレアリスムには直接関わりはないが、ヤン・バテンス氏の勧めで、ヴィトキアナ美術館（装丁の美術館）で開催された「偽についてのワークショップ」を聴講し、書籍の流通や物質的側面について多くの知見を得た。

5 その他の活動

ルーヴェン・カトリック大学では、受入教員のダヴィッド・マルタン氏が主催し、フランス語圏文学の研究者たちが集まる研究グループである ARC (Atelier de recherches collectives) の例会に定期的に参加した。2025年2月14日には、クリスチャン・ドートルモンについての研究発表を行った。また、ルーヴェン・カトリック大学のクリス・ファン・ホイケロム氏、同大学名誉教授のヤン・バテンス氏と面会することができた。国際交流担当のホイケロム氏とは、大学の学生間・研究者間の交流について情報交換をすることができた。また、バテンス氏からはベルギー現代文学の状況や詩人であるバテンス氏自身の作品、新しいメディアである BD の情報や詩作への影響についても貴重な話をうかがうことができた。

6 今後の研究計画

派遣研究期間中は、論文の執筆や研究発表の準備にも時間を割いたため、対象を主としてドートルモンに絞って資料収集を行った。今回は行くことのできなかつた、オランダのコブラ美術館やデンマークのアスガー・ヨルン美術館にも足を運び、実験芸術運動コブラの活動全体にも目を向けたい。また、ドートルモン、コブラ、ベルギーのシュルレアリスムを含め、ベルギーの前衛文学・芸術運動についてより広く研究を進め、それを第二次世界大戦後の前衛文学・芸術史の中に理論的に位置づけることを試みたい。

7 感想・所感

ベルギーのビザの取得には時間も手間もかかり、事務局にも大きな負担をかけることになった。しかし6ヶ月間ベルギーに滞在することができたことで、日本で事前準備をしてから渡航し、現地で資料収集をしながら研究成果をまとめる時間を得たことは大変ありがたかった。諸々の書類の作成や提出にご協力いただいた皆さまに、この場を借りて御礼申し上げたい。

また、長期滞在をすることができたため、シンポジウムで知り合った研究者にもう一度会って話を聞いたり、勧められたアーカイブやシンポジウムに行ったりすることができたことも大変有益であった。多言語国家であるベルギーの状況についても複数の人から話を聞くことができ、今後の研究・教育活動に資する経験になったと思われる。

ルーヴェン・カトリック大学の受け入れ教員であるダヴィッド・マルタン氏の他、日本語学科のヤン・シュミット氏、アドリアン・カルボネ氏には大変お世話になった。本派遣研究の成果を今後の研究・教育に活かせるよう尽力したい。